

紫のいわゆる「嫉妬」

望月郁子

内容

- 一 はじめに
- 二 明石姫君の存在を知らされて
- 三 明石母子上京後
- 四 光の朝顔との交渉と紫

一 はじめに

源氏物語の女主人公紫は、若紫巻で十歳（光との差八歳）以上とされ、△おくて▽の女性で、上流貴族社会における一夫多妻制のもとでの女君としての苦しみによる、自己の内面の成長は朝顔巻からあらわれ、若菜上下巻々に至って成熟をとげるといのが、一般の見方のようなのである。

筆者は、先に「心ざしおかれたる極楽の曼陀羅―紫の成仏と生い立ち」⁽¹⁾において、以下の見解を提示した。

そもそも紫の登場場面は北山の寺である。北山の僧都とその姉の尼君によって、物語登場時点までに、紫は、仏心を培うことを第一とし、仏に守り導かれて衆生をあまねく救う女性―阿弥陀を念じ、浄土の莊嚴を人々に観想させ得る、《女人往生》・一蓮托生の実現者となるべく育てられていたのではないか。若紫巻の紫は、上流貴族の后がねの姫君とは全く異なり、対男性意識を持たず、結婚を夢見もしない。天真爛漫・才気煥発で孤独に強い。年令は八歳（光との差十歳）と見る。新手枕で光を拒否したのも、出産を拒否し、男の愛の奪合の外に身をおき、仏の加護を受けるにふさわしい清らかな生をという思想が紫の中で確立していたからであると見る。

晩年、死期を知った紫は法華經千部供養を主催し、参会者に「仏のおはする所のありさま遠からず思ひやられて、ことなる深き心もなき人さへ罪を失ひつべし（御法「二」）」という感激を授けた。紫は出家せずとも〽成仏〴〵できている。法華經千部の写經に要する年月を思えば、よほど若い時から計画され、殆ど一生をかけて準備を重ねての法華經千部供養である。紫はさらに死後に「かの心ざしおかれたる極楽の曼陀羅」を残した。光はそれを一周忌の供養にし、「阿弥陀仏」を念じた（幻）。

源氏物語の作者は、『観無量壽經』を釈迦から授かった《女人往生》の元祖というべき韋提希夫人（ゐだいけぶにん）的役割を紫に担わせたのではないか。

と見るからには、紫の生涯を筆者なりに見なおさなければならぬとなる。この小論では、紫の「嫉妬」と見られてきた場面をとりあげる。

二 明石姫君の存在を知らされて

「二一」(もの憎みはいつならふべきにか)光の姫君が后になるという宿曜の予言を知った光は、明石の姫君の誕生を「住吉の神のしるべ」と確信し、乳母を選定し、認知の印である御佩刀などを持たせて明石に送った。その噂が紫の耳に入る前に、光は姫君誕生を紫に話す。

「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。¹さもおはせなむと思ふあたりには心もなくて、思ひの外に口惜し
くなん。女にてあなれば、いとこそものしけれ。尋ね知らでもありぬべきことなれど、²さはえ思ひ捨つまじきわざなり
けり。呼びにやりて見せたてまつらむ。³憎みたまふなよ」と聞こえたまへば、⁴面うち赤みて、「あやしう、常にかやう
なる筋のたまひつくる心のほどこそ、我ながら疎ましけれ。もの憎みはいつならふべきにか」と⁵怨じたまへば、いとよ
くうち笑みて、「そよ、誰がならはしにかあらむ。⁶思はずにぞ見えたまふや。人の心より外なる思ひやりごととしてもの
怨じなどしたまふよ。⁷思へば悲し」とて、はてはては涙ぐみたまふ。年ごろ飽かず恋しと思ひきこえたまひし御心の中
ども、をりをりの御文の通ひなど思し出づるには、よろづのことすさびにこそあれと思ひ消たれたまふ。(濤標「七」)
従来、子供のない紫相手の光のデリカシーのなさが専ら問題とされてきた部分である。

紫は新手枕で光を拒否し、出産の意志のないことを光に認めさせてきた。であるからこそ、光は「¹さもおはせなむと思
ふあたりには心もなくて、思ひの外に口惜しくなん」と光の本音―紫の実子が欲しい―が言えるのだと見る。紫が「⁴面
うち赤」めるのは、実子がいないからではない。姫君を迎えて紫に見せたい、姫君を「³憎みたまふなよ」と光から言われる
のを恥辱と感じてである。「あやしう、常にかやうなる筋のたまひつくる心のほどこそ、我ながら疎ましけれ。もの憎みは
いつならふべきにか」ニクムという感情を持つこと自体の否定である。光からニクムナと言われなければならない自分の

心の至らなさを「我ながら疎ましけれ」と意識し、「もの憎みはいつならふべきにか」と光の愛の奪合の外に立つ。

大体、上層貴族社会における一夫多妻制のもとでの女性の嫉妬は、女性の愛情が純粹であればあるだけ回避不能となりがちなものである。光は女性の嫉妬の厄介さ、恐ろしさを、雨夜の品定めでの実話・光を迎えての正妻葵上の態度・夕顔に対する頭中将の正妻四の君の脅迫（夕顔死後の右近の話）・葵上と六条御息所との争いなどを介して熟知してきた。今、紫に「憎む」という感情を持ったことがないと言われて、さすがとは思っても、光には紫に対する負い目があるだけに、紫の突放しを光に対する紫の不信の表明とする意識から光は抜け出せない。「⁶思はずにぞ見えたまふや（心外ナゴ様子デスネ）」「⁷思へば悲し（自力デハドウショウモナイ）」と言って涙ぐみ、明石君との交渉以前の、紫との心の通じ合いを思うと、明石君とのことは本物ではないと否定する気分になでなる。

「¹²（我は我）光は、姫君が大事なのだと、気を取り直してか、

「¹この人をかうまで思ひやりこととふはなほ思ふやうのはべるぞ。まだきに聞こえば、またひが心得たまふべければ」とのたまひ²さして、（濡標「七」）」

と、「¹この人（姫君）をかうまで思ひやりこととふは」と理由を言うかと思わせながら、「思ふやうのはべるぞ。まだきに聞こえば、またひが心得たまふべければ」と逃げて、「のたまひ²さして（話を途中デ止メテ）」となる。「¹この人」は明石君とも読まれてきたが、以下との続き上、²サシテが宙に浮く。姫君と見なければならぬ。

これ以前、明石の君とののはじめての逢う瀬の直後、光は文で紫にほめかした。△住吉の神のしるべ▽は打ち明けることができず、「またあやしうものはかなき夢をこそ見はべりしか。…（明石「一四」）」と書いた。⁽²⁾紫にしてみれば、帰京後、光が文の「夢」を伏せたままでの気にならなくもなかったであろう。光が姫君に寄せる期待を、時期尚早として今なお打ち明けないことを、紫はどううけとめているのか。隔て・不信といった方向ではなく、むしろ、姫君が光にとって、

そこまで重要な存在だと理解しようとするのではないか。

光は、話し出したついでに、姫君の為に実母の美質を紫に理解させなければならぬと思ったのであろう。話題を明石君に移して、

「人柄のをかしかりしも、⁶所がらにや、めづらしうおぼえきかし」など語りきこえたまふ。あはれなりし夕の煙、言ひしこと、まほならねどその夜の容貌ほの見し、琴の音のなまめきたりしも、すべて御心とまれるさまにのたまひ出づるにも、我はまたなくこそ悲しと思ひ嘆きしか、³すさびにても心を分けたまひけむよとただならず思ひつづけたまひて、「⁴我は我」とうち背きながめて、「⁵あはれなりし世のありさまかな」と、独り言のやうにうち嘆きて

思ふどちなびく方にはあらずとも⁶われぞ煙にさきだちなまし」

という。光のデリカシイの無さといえはそれまでであるが、光の話を聞く紫は「³すさびにても心を分けたまひけむよ」と事実を確認する。光の須磨退去の苦しい期間中を二人の一心同体を信じて生きてきた紫であるから、光に対して正面からの抗議をしてよさそうなものであるが、紫は抗議などせず、「⁴我は我」と一言いう。新手枕で光を拒否した紫である。いわゆる結婚をしている女君ではない。仏の加護を失ってはならない。自分の心を汚してはならない。そう意識して、光に背を向けて物思いに沈み、光の明石在住時をふりかえり、「⁵あはれなりし世のありさまかな」と独り言のようにためいきまじりに言う。アハレは第三者の立場での感慨である。自分を含めて往時を客体化し、事実をそのまま理解しようとし、当事者一人一人がそれぞれ可哀相な情況だったのだと把握しているのであろうか。続く紫の歌の「⁶われぞ煙にさきだちなまし」は、三角関係の葛藤に入らないための紫の現状からの脱出の表明である。偽りは交じらない。厳しい。紫の意識には、姫君も在るであろう。光は「呼びにやりて見せたてまつらん」と話を切り出し、姫君に「思う心はべるぞ」と将来を期待している。紫は稚児をいつくしむ。当の姫君は誕生しても生存している父親に会うこともできない。姫君本位に見

れば紫は父を奪っている存在である。姫君本位の意識の線上に生じる溜息でもあろうか。光への強烈な突放しである。紫の新生児への心は光には通じまい。

「二三」〔腹立ちな〕す紫

「¹何とか。心憂や。

誰により世をうみやまに行きめぐり絶えぬ涙にうきしづむ身ぞ

いでや、いかで見えたてまつらむ。命こそかなひがたかべいものなめれ。はかなきことにて人に心おかれじと思ふも、ただひとつゆゑぞや」とて、箏の御琴ひき寄せて、掻き合はせすさびたまひて、そそのかしきこえたまへど、²かのすぐれたりけむもねたきにや、手も触れたまはず。いとおほどかに、うつくしうたをやぎたまへるものから、さすがに³執念きところつきて、⁴もの怨じしたまへるが、なかなか愛敬づきて腹立ち⁵なしたまふを、⁶をかしう見どころありと思す。

〔濤標「七」〕

「われぞ煙にさきだちなまし」は歌のことばである。光は、光に対する正面からの決別の歌ととり、歌の言葉の呪力を直感したか、「¹何とか。心憂や。」と絶叫する（紫の心に呪いはない。ないから言えたのである。）即座に、大事なものは紫だと詠み、紫をなだめ、会話を諦めて、琴の調律をして勧めるが、紫は手も触れない。光はそれを琴の名手明石君に対する紫の対抗意識ととる（²）。琴こそ弾かないが紫は光を責めるでも怒るでもない。「われぞ煙にさきだちなまし」以上の言葉もあるまい。「³執念き」はここでは潔癖な一徹さというか。「⁴もの怨じ」は光に対する突放しである。おそらく口をきかないのであろう。【上掲本文にウラムは現われず、エンズが二ヶ所現われている。二語の相違は、ウラムが通じ合えるという意識を前提として、本心を解ってほしい・相手の本心を知りたいと口に出して言う意であるのに対し、エンズは、通じ合えないとか、今更始まらないといった意識に立ち、相手を突放すことをいい、無言のこともある、というところにある

そうに思う。】紫は自分の心を汚したくない。「我は我」に閉じこもって、涙も見せず、怒った表情もなく、無垢な感じで、柔らかでありながら、光を突放し通す。そういう紫を光は「をかしう見どころあり」と思っている。「腹立ち⁽³⁾なし」のナシはナルに対するナスである。紫は自分の精神を守るために、沈黙を守って、意図的に光を突放し続けている。それを「腹立ちなし」というか。

以上の限りでは、紫は、「嫉妬」という語で表現される心情そのものを拒否し通している。時に光二十九歳、紫十九歳である。

「二四」五月五日が姫君の五十日であった。光は祝いの使者を送り、

「海松や時ぞともなきかげにゐて何のあやめもいかにわくらむ

心のあくがるるまでなむ。なほかくてはえ過ぐすまじきを、¹思ひたちたまはね。さりともうしろめたきことは、よも」と書いたまへり。：

御返りには

「数ならぬみ島がくれに鳴く鶴を今日もいかにととふ人ぞなき

よろづに思うたまへむすばほるるありさまを、かくたまさかの御慰めにかけはべる命のほどもはかなくなむ。²げにうしろやすく思うたまへおくわざもがな」

と、まめやかに聞こえたり。

うち返し見たまひつつ、「あはれ」と長やかに独りごちたまふを、女君、後目に見おこせて、「³浦よりをちに漕ぐ舟の」と、しのびやかに独りごちながめたまふを、「まことはかくまでとりなしたまふよ。こはただかばかりのあはれぞや。

⁴所のさまなどうち思ひやる時々、来し方のこと忘れがたき独り言を、⁵ようこそ聞きすぐいたまはね」など、恨みきこ

えたまひて、⁶上包ばかりを見せたてまつりたまふ。手などのいとゆゑづきて、やむごとなき人苦しげなるを、⁷かかれ
ばなめりと思す。(濔標「八」)

姫君の五十日を期に光と明石君との文のやりとりがあった。光は明石君に上京を勧め、心配は不要と書いた(1)。過日の
紫の反応(上述「二3」)に、光は安心してゐる。明石からの返事を紫の前で広げる。すべてオープンにという方針らしい。
明石君は、「²げにうしろやすく思うたまへおくわざもがな」と文に記した。光は何度も読んで、「あはれと長やかに独りご
ちながめたまふ」。光の独り言を耳にし、紫は流し目をおくって「³浦よりをちに漕ぐ舟のと、しのびやかに独りごちてな
がめたまふ」。互いに独り言である。光の「あはれ(長く引く)」対紫の「浦よりをちに漕ぐ舟の」である。姫君の存在を
打ち明けられた時、紫は「われぞ煙にさきだちなまし」と詠んで怨じて(無言で)通した。紫の引く伊勢の歌の下句は
「われをばよそにへだてつるかな」である。紫の心は「我は我」で、光と明石君の中には入ろうとしないの意であろう。
紫の小声の一言に、ここぞとばかり光は反応し、「ようこそ聞きすぐいたまはね(気にしているではないか)」と、紫を引
き入れ、「⁶上包」だけを見せる。明石君の筆跡はトップレベルの女性にひけをとらない。紫はなるほどと明石君の高さを
理解する。「手などのいとゆゑづきて」は草仮名ではないか。

この場面に嫉妬を読む読まないは、読む人次第であらうが、嫉妬はともかく、光と紫との呼吸の合った沈黙ぶりが面白
い。

その年の冬か、光は前斎宮の入内について藤壺の内意を得、前斎宮を養女として

「ここ(二一条院)に渡したてまつりてむと思す。女君にも、「しかなん思ふ。語らひきこえて過ぐいたまはむに、いとよ
きほど(紫十九歳、前斎宮二十歳)なるあはひならむ」と聞こえ知らせたまへば、うれしきことに思ひて、御わたりの
ことをいそぎたまふ。(濔標「二五」)

紫は前斎宮を迎える準備に精を出す。

ところで、光は明石君を話題にする際、「⁶所がらにや（上述「二3」）」「⁴所のさまなど」と明石の土地そのものの魅力を強調する。聞く紫は明石の土地に関心を抱いて自然である。後の語り（二年後）であるが、

「かの旅の御日記の箱をも取り出でさせたまひて、このついでにぞ女君にも見せたてまつりける。…今まで見せたまはざりける恨みをぞ聞こえたまひける。

ひとりゐて嘆きしよりは海女のすむかたをかくてぞ見るべかりける

おぼつかなさは、慰みなましものを」とのたまふ。いとあはれと思して、

うきめ見しそのりをりよりも今日はまた過ぎにしかたにかへる涙か

…さすがに浦々のありさまさやかに見えたるを選りたまふついでにも、かの明石の家居ぞ、まづいかにと申しやらぬ時の間なき。（絵合「五」）」

紫は明石という土地のイメージを得、光がいう「所がら」「所のさま」を共有できるようになった。

三 明石母子上京後

「三1」二条東院が完成し、花散里が移った。光は「東の対は、明石の御方と思しおきてたり。（松風「二」）」と、迎える準備を整えたが、明石入道は全く独自に大堰の山荘（明石君の母尼君の祖父、中務宮の旧領）を修築し、その完成を光に知らせ、尼君を付き添わせて、姫君母子を大堰に送った。光は「親しき家司」を大堰に派遣はしたが、「わたりたまはむことは、とかう思したばかりに日ごろ経ぬ。（「五」）」となかなか訪問できなかった。

当時、光は嵯峨に御堂を建立中であり、桂院も新築していた。明石の大堰の山荘は双方に近い。

「大臣（光）、なかなか静心なく思さるれば、人目をもえ憚りあへたまはで渡りたまふを、女君は、¹かくなむとたしかに知らせたてまつりたまはざりけるを、例の、聞きもやあはせたまふとて消息聞こえたまふ。「桂に見るべきことはべるを、いさや、心にもあらでほど経にけり。²とぶらはむと言ひし人さへ、かのわたり近く来ゐて待つなれば、心苦しくてなむ。嵯峨野の御堂にも、飾りなき仏の御とぶらひすべければ、一三日ははべりなん」と聞こえたまふ。³桂の院といふ所にはかにつくろはせたまふと聞くは、そこに据ゑたまへるにやと思すに⁴心づきなければ、「斧の柄さへあらためたまはむほどや、待ち遠に」と⁵心ゆかぬ御気色なり。例のくらべ苦しき（無言の根比べになって困る）御心、いにしへのありさまなごりなし、と世人も言ふなるものを、何やかやと御心とりたまふほどに、日たけぬ。（「六」）」

紫が明石姫君の存在を知らされ、「呼びにやりて見せたてまつらむ。憎みたまふなよ。（落標「七」）」と光に言われてから、二年余りになる。東院も完成し、紫も姫君の上京を待っていたであろう。光にしても、大堰に來ていると紫に打ち明けにくい。「¹かくなむとたしかに知らせたてまつりたまはざりける」となる。

光は、「新築した桂院に用事がある、」²とぶらはむと言ひし人さへ、かのわたり近く来ゐてまつなれば、心苦しくてなぬ。」嵯峨野の御堂にも参らなければならぬ、一三日出掛けてくる」と紫に出掛ける挨拶をする。

明石母娘の上京を、紫はここで初めて知らされた。「³桂の院といふ所にはかにつくろはせたまふと聞くは、そこに据ゑたまへるにや」と紫はとっさに推測した。明石側に大堰の山荘があるとは知らない。姫君が紫から遠ざけられてしまう、話が違ふではないか、その気持ち「⁴心づきなければ」である。「斧の柄さへあらためたまはむほどや、待ち遠に」であるが、「斧の柄云々」は童子に夢中になって時を忘れる故事であるという。紫の真意は、姫君をはやく紫の手元にある。それが表面化して「⁵心ゆかぬ御気色」となる。明石側が東院に入らない理由が紫には理解しにくいのであろう。

光は、もっと自分を信用して欲しいと思っているが、紫の真意は光に通じないらしい。

「三二」五日後の朝、二条院に帰った光は、一息ついてから、紫に「¹山里の御物語など」し、

「…このすき者どもの尋ね来て、いいたう強ひとどめしにひかされて。今朝はいとなやまし」とて大殿籠れり。²例の、心とけず見えたまへど、見知らぬやうにて、「³なずらひならぬほどを思しくらぶるも、わろきわざなめり。⁴我は我と思ひなしたまへ」と教へきこえたまふ。（松風「一二」）

「¹山里」が大堰・桂院・嵯峨の御堂を含む周囲全体を言うのか、大堰の明石母娘を中心とするのかであるが、その夜の対紫の話に「まことは」と前置きして姫君に会ったと言うことからして、新築した桂院の話程度か。

「²例の、心とけず見えたまへど」とは、紫が光に無言で対していることをいう（前述「二二」）。紫は光が新築なった二条東院に明石母娘を迎えると期待していた。ここでは、母娘を「据ゑ」る目的で桂院を建てたと邪推している（「三一」）。それが光に通じない。「³なずらひならぬほどを思しくらぶるも、わろきわざなめり。」という光の忠告は、紫からすれば、自分はそんなことは問題にしていけないとしかならない。二年余り前、姫君の存在を紫に打ち明け、明石君の美質を語った時、紫は「我は我」と一言いって、光に背を向け物思いに沈んだ（「二二」）。光はその紫の言葉を記憶していて、「⁴我は我と思ひなしたまへ」と「教へきこえたまふ」以外に言葉がない。

暮れ方、光は参内。出掛け間際に文を書く。大堰へらしい。その夜、

「とけざりつる御気色とり、夜更けぬれどまかでたまひぬ。ありつる御返り持て参れり。¹えひき隠したまはで御覧ず。ことに憎かるべき節も見えねば、「これ破り隠したまへ。むつかしや。かかるものの散らむも、今はつきなきほどになりけり」とて、御脇息に寄りゐたまひて、御心の中には、いとあはれに恋しう思しやらるれば、灯をうちながめて、こにもものたまはず。文はひろごりながらあれど、²女君見たまはぬやうなるを、「せめて見隠したまふ御目尻こそわづらはしけれ」とてうち笑みたまへる、御愛敬ところせきまでこぼれぬべし。（同上）」

以前、姫君五十日の祝いの返事を光は紫の前で広げ、すべてオープンにという姿勢をしめした。ここでもその姿勢を変えることはできない。「¹えひき隠したまはで」以下、「文（大堰からの返事）はひろごりながらあれど」と、光は行動で示して後無言である。紫は「我は我」に閉じ籠もって、反応を示さず沈黙を続ける。姫君五十日の祝いへの返事の時（二四）と変わらない。

「さし寄りたまひて、¹まことは、らうたげなるものを見しかば、契り浅くも見えぬを、さりとてもめかさむほども憚り多かるに、思ひなむわづらひぬる。²同じ心に思ひ定めたまへ。いかがすべき。³ここにてはぐくみたまひてんや。蛭の子が齡にもなりにけるを。罪なきさまなるも、思ひ棄てがたうこそ。いはけなげなる下つかたも紛らはさむなど思ふをも、めざましと思さずは⁴ひき結ひたまへかし」と聞こえたまふ。「⁵思はずにのみとりなしたまふ御心の隔てを、せめて⁶見知らずうらなくやはとてこそ。いはけなからん御心には、⁷いとよかなひぬべくなん。いかにうつくしきほどに」とて、⁸すこしうち笑みたまひぬ。児をわりなうらうたきものにしたまふ御心なれば、得て抱きかしづかばやと思す。（同上）」

光が紫に「さし寄りたまひて、沈黙を破って、¹まことは、らうたげなるものを見しかば、…」と姫君の話をきりだす。「²同じ心に思ひ定めたまへ」「³ここにてはぐくみたまひてむや」（姫君の袴着で）⁴ひき結ひたまへかし」…という。紫が待っていたことがやっと実現しそうである。

紫も「⁵思はずにのみとりなしたまふ御心のへだてを、せめて⁶見知らずうらなくやはとてこそ。」と沈黙を破る。「⁵思はずにのみとりなしたまふ」は、帰宅直後の光の言葉「なずらひならぬほどを思しくらぶる」をうけ、「御心のへだて」はそれに、明石母娘の上京を紫に知らさず、東院に迎えない理由の説明がないことが加わるか。沈黙を破る紫は、まず、紫に対する光の「御心のへだて」にそれなりの不満はあって当然と、自分のつっぱりの正当性を主張する。

「いはけなからん（姫君の）御心には、¹いとうかなひぬべくなん。」は、紫（二十一歳）の自認である。紫は、仏の加護を受けることのできる清らかな生をめざしてきた。いわゆる三角関係が生じると見ると、「我は我」と、男の愛の奪合の外に身を置き、ニクムという感情そのものを拒否し、光が自分以外の女性（ここでは明石君）と交渉を持っても、それに対しては一切無言で突放す。自己の意識の中に三角関係を成立させないように努める。それが紫の自分の精神の守り方ではないか。一夫多妻制社会における女君一般の苦しみを体験し、苦しみを乗り越える女君の心情とは全く別次元の心情を求めて紫は生きる。幼子の無垢を心の手本とする。紫は *innocence* を求め続ける女君である。

紫には光の姫君を抱ける希望が見えてきた。その紫の表情を「すこしうち笑みたまひぬ」と語る。⁽⁴⁾

姫君を手放す明石君を思うと、光は「いかにせまし、迎へやせまし、と思し乱る。（同上）」

「三三」その年の内に、光は大堰に出向き、姫君を二条院に連れて帰る。

「しばしは人々求めて泣きなどしたまひしかど、おほかた心やすくをかしき心ざまなれば、上に¹いとうつき睦びきこえたまへれば、いみじうつくしきもの得たりと思しけり。他ごとなく抱き扱ひ、もてあそびきこえたまひて、²乳母も、おのづから近う仕うまつり馴れたり。またやむごとなき人の乳ある添へてまゐりたまふ。（薄雲「三八」）」

姫君は紫に「¹いとよくつき睦び」、二人は理想的な関係になった。「²乳母も、おのづから近う仕うまつり馴れたり」と、乳母に対する紫の配慮もゆきとどいている。また、身分の高い乳母も召され、姫君養育の情況が整えられる。

「御袴着は、何ばかりわざと思しいそぐことはなけれど、¹けしきことなり。御しつらひ、雛遊びの心地してをかしう見ゆ。²参りたまへる客人ども、ただ明け暮れのけぢめしなれば、³あながちに目もたたざりき。ただ、姫君の纏ひき結ひたまへる胸つきぞ、うつくしげき添ひて見えたまへる。（同上）」

姫君の袴着の儀式が行なわれた。「¹けしきことなり」と格調の高さは光の姫君にふさわしいものであった。²、³の部分、

判りにくいが、「²参りたまへる客人ども」とは、タマフとドモ（敬意の対象の複数はタチ）との共存から推して、姫君のために仕える身分の高い人々であったか。例えば、新参の乳母は「やむごとなき人の乳ある（上掲）」であった。³「あながちに目もたたざりき」は儀式に参加した「客人ども」の装束であり、その格式の高さが常日頃と特に違わないことをいうのではないか。「目もたたざりき」のキは、儀式の場の雰囲気として目立たないこと自体が記憶に残る印象を与えたことをいうととる。とすれば、姫君の傍近く仕える人々には日頃から格式の高い身なりが要求されていたとなる。

姫君を手放した明石君を案じて光は

「年の内に忍びて渡りたまへり。…心苦しければ、御文なども絶え間なく遣わす。女君も、今はことに怨じきこえたまはず、うつくしき人に罪ゆるしきこえたまへり。（薄雲「七」）」

姫君を手元にひきとって以後、紫は、明石君と交渉する光を突放し沈黙を続けることはしなくなった。

年が明ける（紫二十二歳）。光は、二条東院に落ち着いた花散里を「近きしるしはこよなくて、のどかなる御暇のひまなどにふと這ひ渡りなどしたまへど、夜たちとまりなどやうにわざとは見えたまはず（薄雲「八」）」と遇する。花散里は東院に移った甲斐があった。

新年の行事を済まして、光は大堰を訪問する。

「…常よりことにうち化粧じたまひて、桜の御直衣にえならぬ御衣ひき重ねて、たきしめ、装束きたまひて罷申ししたまふさま、隈なき夕日にいとどしくきよらに見えたまふを、女君¹ただならず見たてまつり送りましたまふ。姫君は、いはけなく御指貫の裾にかかりて慕ひきこえたまふほどに外にも出でたまひぬべければ、立ちとまりて、いとあはれと思したり。…²何²ごとも聞き分かで戯れ歩きたまふ人を、上はうつくしと見たまへば、³をちかた人のめざましさもこよなく思しゆるされにたり。いかに思ひおこすらむ、我にていみじう恋しかりぬべきさまをとうちまもりつつ、⁴ふところに入れて、

うつくしげなる御乳をくくめたまひつつ戯れるたまへる御さま見どころ多かり。御前なる人々は、「などか同じくは」「いでや」など語らひあへり。(薄雲「九」)

光は、明石君方へ新年の訪問に出掛けると紫に挨拶する。念入りな身繕いが夕日に映えて一段ときよらな光を、紫は「¹ただならず見たてまつり送りましたまふ」。タダナラズといえは△心中おだやかでない▽平気でいられない▽といった嫉妬の感情と読むのが普通のようなのであるが、原義は△タダデハナイ▽であり、情況に応じて多様な読みがあり得る。当該の紫の場合は、光の明石君評価の程度の高さであり、明石君がただの(アリキタリノ)人ではない、光がここまで氣を使う美質のある女性なのだと認識し、そこで止まる。

紫の意識の中での明石君は「³をちかた人のめざましき」である。光が予定した二条東院に入れば、花散里の場合のように、光も大げさな外出をする必要がない。姫君にしても実母に近くにいてもらえる。東院に入らず、自分から進んで京の西の川寄りに住むとは、「めざまし」と意識する紫である。

「(父光を慕って)²何ごとも聞き分かで戯れ歩きたまふ人(姫君)を、上(紫)はうつくしと見たまへば、³をちかた人のめざましきもこよなく思しゆるされにたり。いかに思ひおこすらむ、我にていみじう恋しかりぬべきさまをと(姫君を)うちまもりつつ」と、姫君を大事だと思うと、その母に対する「めざましき」も許容できる気持ちになり、実の母でない自分でも手放せない氣がするのだからと、我が子を案じているであろう今現在の実母の心を理解しようとして、紫は「⁴ふところにいれて、うつくしげなる御乳をくくめたまひつつ戯れるたまへる御さま見どころ多かり」と、実母の代役をして戯れる。祖母の尼君がそのようにして、誕生直後母に先立たれた紫を育てた、その尼君の育て方が紫の身体によみがえっているのではないか。

四 光の朝顔との交渉と紫

「四一」光の対女性関係で紫が悩み、紫が大人らしくなってくるのは、光の朝顔との交渉を媒体としてであったと言われてきた。その場合、紫は孤独感と寂寥感にとどまるのか、いわゆる「嫉妬」に至るのか、本文に即して、これを確かめなければならぬ。

として問題は、紫の悩みの直接の誘因が、朝顔方の女房から出たであろうゴシップに在ることである。結論を先に言えば、朝顔自身は光を徹底して拒絶し、光の敗北でことは終わった。紫は光が女性に拒絶されるとは思ってもいない。紫の苦しみはゴシップにはめられたが故のものである。ゴシップを利用して男君と女君とを結びつけるのが女房の役割とでも思っているのかのとき朝顔方の女房のゴシップに、朝顔自身は若い時から苦しめられた。朝顔巻は、朝顔に、自分の女房を厳しく警戒させて身を守らせる一方、⁽⁵⁾△女房社会のゴシップとは▽を紫に体験させる。△女房社会のゴシップ批判▽として書かれた巻と見れそうな一面を備えている。朝顔巻における紫の女君としての成長とは、本質的には、ゴシップへの対し方を知ることには在るのではないか。

以下、本文を検討する。

「四二」「世の中に（光の朝顔との交渉の噂が）漏りきこえて、¹「前斎院、ねむごろに聞こえたまへばなむ、女五の宮などもよろしく思したなり。似げなからぬ御あはひならむ」など言ひけるを、対の上は伝へ聞きたまひて、しばしは、²「さりとも、さやうならむこともあらば隔てては思したらじ」と思しけれど、³うちつけに目とどめきこえたまふに、御気色なども例ならずあくがれたるも心憂く、「まめまめしく思しなるらむことを、つれなく戯れに言ひなしたまひけんよ」と、「同じ筋にはものしたまへど、おぼえことに、昔よりやむごとなく聞こえたまふを、御心など移りなばはしたな

くもあべいかな。年ごろの御もてなしなどは立ち並ぶ方なくさすがにならひて、人に押し消たれむこと」など、人知れず思し嘆かる。「かき絶えなごりなきさまにはもてなしたまはずとも、いとものはかなきさまにて、見馴れたまへる年ごろの睦び、あなづらはしき方にこそはあらめ」などさまさまに思ひ乱れたまふに、よろしきことこそ、うち怨じなど憎からずきこえたまへ、⁴まめやかにつらしと思せば、色にも出だしたまはず。端近うながめがちに、内裏住みしげくなり、役とは御文を書きたまへば、⁵「げに人の言はむなしかるまじきなめり。気色をだにかすめたまへかし」とうとましくのみ思ひきこえたまふ。(朝顔「四」)

女房社会のゴシップ⁽¹⁾が紫を悩ました直接の原因である。父式部卿宮が亡くなり、光は皇統の血を堅持する立場から、永年の交際にもう一步踏み込んで前斎院の説得にかかるが、朝顔自身は光に従わない。朝顔付きの女房達が、女五宮を持ち出してゴシップを流して光の加勢をする。ゴシップを聞いた紫は、明石君の場合の光の対し方を踏まえて「隔てては思したらじ⁽²⁾(紫に打ち明けるはずだ)」と思うが、光を観察して⁽³⁾、ゴシップを信じざるをえなくなる。ゴシップの「似げなからぬ御あはひ」にはめられ、「人に押し消たれむこと」と、自尊心を揺すぶられる。打ち明けない光を「⁴まめやかに(本気で)つらし(ヒドイナサリ方)」と思せば、(光が打ち明けない限り、ことを知ったとは)色にも出したまはず」に徹する。

光は紫がゴシップにはめられているのが見抜けない。従わない朝顔に苦しめられている。紫は光が袖にされようとは思ってもみない。「我は我」となれないのは、光が打ち明けず、紫に真相がつかめないからである。これがゴシップにはめられた女君の身動きできない苦しみである。

「四三」「雪うち散りて、艶なる黄昏時に、なつかしきほどに馴れたる御衣どもを、いよいよたきしめたまひて、心ことに化粧じ暮らしたまへれば、いとど心弱からむ人(紫)はいかがと見えたり。」

さすがに、罷申しはた聞こえたまふ。「女五の宮のなやましくしたまふなるをとぶらひきこえになむ」とて、突いゝるたまへれど、¹「見もやりたまはず。若君をもてあそび紛らはしおはする側目のただならぬを、「あやしく御気色の変れるべきころかな。罪もなしや。塩焼き衣のあまり目馴れ、見だてなく思さるるにやとてと絶えおくを、またいかが」など聞こえたまへば、²「馴れゆくこそげにうきこと多かりけれ」とばかりにて、うち背きて臥したまへるは、見棄てて出でたまふ道ものうけれど、宮に御消息聞こえたまひてければ、出でたまひぬ。

かかりけることもありける世をうらなくて過ぐしけるよと思ひつづけて臥したまへり。鈍びたる御衣どもなれど、色あひ重なり好ましくなかなか見えて、雪の光いみじく艶なる御姿を見出だして、³まことに離れまさりたまはばと忍びあへず思さる。御前など忍びやかなるかぎりして、「内裏よりほかの歩きはものうきほどになりけりや。桃園の宮の心細きさまにてもものしたまふも、式部卿宮に年ごろは譲りきこえつるを、今は頼むなど思しのたまふもことわりにいとはしければ」など、人々にものたまひなせど、⁴「いでや。御すき心の古りがたきぞあたら御瑕なめる。軽々しきことも出で来なむ」などつぶやきあへり。（朝顔「五」）

外出の挨拶をする光に対する紫の態度（¹）、それに対する光の言葉に和歌の一節だけで答えること（²）は、明石姫君を二条院へ迎える前の光に対する突放し（前述「二」）とパターンとしては大差ない（²の歌「馴れゆくは憂き世なればや須磨の海女の塩焼き衣間遠なるらむ」に今回の被害者に明石君も含めている）が、³「まことに離れまさりたまはば」と、最悪の事態を案じる。光が表向きの立場を女房に説明するが、紫付きの女房までが、ゴシップに引きずられ、光不信（⁴）をつぶやきあい、紫の不安を拭い去ろうとはしない。

朝顔の拒否が光をエスカレートさせる。「二条院に夜離れ重ねたまふを、女君は戯れにくくのみ思す。忍びたまへど、いかがうちこぼるるをりもなからむ。（「八」）」打ち明けない光に、紫の孤独感と寂寥感がつのる。

〔四4〕「あやしく例ならぬ御気色こそ心得がたけれ」とて、御髪をかきやりつつ、いとほしと思したるさまも、絵に描かまほしき御あはひなり。…まろがれたる御額髪ひきつくるひたまへど、¹いよいよ背むきてもものも聞こえたまはず。「いといたく若びたまへるは、誰がならはしきこえたるぞ」とて、常なき世にかくまで心おかるるもあぢきなのわざやとかつはうちながめたまふ。²「齋院にはかなしごと聞こゆるや、もし思ひがむる方ある。それはいともてはなれたるにとぞよ。おのづから見たまひてむ。昔よりこよなうけ遠き御心ばへなるを、さうざうしきをりをり、ただならで聞こえなやますに、かしこもつれづれにものしたまふところなれば、たまさかの答へなどしたまへど、³まめまめしきさまにもあらぬを、かくなむあるとしも愁へきこゆべきことにやは。うしろめたうはあらじと思ひなほしたまへ」など、日一日慰めきこえたまふ。〔八〕」

光が紫を慰めるが、紫は背を向け無言のままである（¹）。光はやっと朝顔との仲を（²）以下のごとく紫に打ち明ける。（³）の一行部分は、今まで打ち明けなかった言い訳であり、朝顔が従わなかったことのほめかしである。

〔四5〕雪の夜、光は「…¹冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの身にしてみて、この世の外のことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。…〔九〕」と言って、「御簾捲き上げさせ」「童べおろして雪まろばしせさせたまふ。」光は紫相手に、藤壺・朝顔・朧月夜・明石君・花散里の人柄を話す。朝顔については「前斎院の御心ばへは、（藤壺・紫とは）またさまことにぞみゆる。さうざうしきに何とはなくとも聞こえあはせ、我も心づかひせらるべきあたり、ただこの一ところや、世に残りたまへらむ」と言う。

夜が更けていく。

「月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。女君、

こほりとぢ石間の水はゆきなやみそらすむ月のかげぞながるる

外を見出だして、すこしかたぶきたまへるほど、似るものなくうつくしげなり。髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえて、めでたければ、いささかわくる御心もとりかさねつべし。鴛鴦のうち鳴きたるに、

かきつめてむかし恋しき雪もよにあはれを添ふる鴛鴦のうきねか」

紫から歌を詠みかける。光の朝顔との関係の打ち明け話を聞き、光の女君方の人柄の批評を聞き、紫は、女房のゴシップにはまりこんだが故に苦しんだ自らをクールに見つめ、澄む月に光る雪の庭をながめて自分の心を浄化したのではないか。浄化した心で紫から光に歌を詠みかけた。「物思う女の、美貌の典型」⁽⁶⁾とされる「外を見出だして、すこしかたぶきたる」という紫のしぐさは、この夜、早くの光の言葉「¹冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの身にしてみても、この世の外のことまで思ひ流され……」⁽¹⁾の真髓を心に浸透させようとしてのしぐさである。その紫を「似るものなくうつくしげなり」という。紫に多用されるウツクシは、大人には求めにくい、紫固有の[^]無垢[^]innocenceを強調すべく用いられるのではないか。

〔注〕

- (1) 望月郁子「心ざしおかれたる極楽の曼陀羅―紫の成仏と生い立ち―」『二松学舎大学人文論叢 第71輯』二〇〇三年十月
- (2) 望月郁子「宿曜の予言の内容を光は何時知ったか」四 『二松学舎大学論集 第四十七号』二〇〇四年三月
- (3) 『源氏物語大成』に本文異同なし。
- (4) 田中栄一郎「[^]うちゑむ[^]考―源氏物語の場合―」『二松学舎大学論集 第四十六号』二〇〇三年三月
- (5) 望月郁子『源氏物語は読めているのか―末世における皇統の血の堅持と女人往生』第一部第四章 前坊廢太子 三 朝顔と光との交渉 二〇〇二年六月 笠間書院
- (6) 『完訳日本の古典』脚注一六など。